

# 新 工 芸 ニュース

NO.85

2021年1月1日発行

発行所 〒114-0014 東京都北区田端3-13-2  
谷中田美術第2ビル4階  
公益社団法人 日本新工芸家連盟事務所  
TEL03-3828-5470

## 2021年



「地に育つ―記憶の中から―」 (鍛金) 中村武郎

# 新しい年を迎えて

日本新工芸家連盟理事長 中村武郎

初春のお慶びを申し上げます。

昨年は新型コロナウイルスの影響から第四十二回展が中止となり、無念な思いをしました。今年は無事開催され、一年の精進による力作が陳列されることを祈るばかりです。

近年、審議員の活動は著しく、「若手育成のための企画」、「会の運営面」、「今回のコロナ感染症対策関係」等に関して頻繁に会合（昨年はオンライン会議）を行い、将来を見据えた多くの提案を頂くようになりました。大変喜ばしいことです。

一般会員の皆様には新年早々から苦言を申し上げるようになってしましますが、近年、総会、懇親会、各地区会の研究会等での出席者が少なくなり、会のこと、作品のことなどを議論し、また交流を深めようとする方々が限られてきたようで寂しく感じています。皆さんの、連盟や地区会への積極的な参加は会の発展、企画の進展のみに終わらず、作家自身のためにも大きな意味を持ちます。「人に話す」、「人から聞く」ことで、自分を見つめ直す機会になり、制作への意欲を高めることができ、自身の表現に広がりを持たせ、結果的には連盟の向上にもつながっていきます。多くの方との交流と対話を大切にし、実りの多い一年にして欲しいと願います。

会員一同、心ひとつにして第四十三回展を盛り上げていきましょう。

## 改組新第七回日展会員賞

### 「撓屈『瀝V』」(磁) 待田 和宏

Q ご受賞おめでとうございます。まずは受賞の感想をお聞かせください。

A この度、改組新第七回日展に際しまして、会員賞の榮譽を賜り、誠にありがとうございます。全く思いがけなく、驚き、また戸惑い、そんな中、皆様からお祝いの言葉をいただくたびに喜びより受賞の重みと責任を感じている次第です。ひとえに諸先生、先輩方のご指導、ご助言の賜物と、深く感謝致しております。

Q 作品の題名「撓屈『瀝V』」はどのような意味合いが込められていますか。

A 撓屈とは、撓め曲げる事を意味します。一滴の集積から始まる水の流れは、岩肌を伝う撓屈、すなわち、撓めて曲げた細線となり、時には倒木を乗り越え光に飛び散りながら、やがて美しい沢水となり下流を目指します。その光景を表現しました。制作する上でご苦労されたことをお聞かせください。

A やはり何といつても轆轤技法です。陶芸技法に共通する形式的特徴であり、轆轤の本質をなすもの



である「反復」は制作過程において必然的に伴うものです。今回の作品も反省と試行錯誤の中から生まれた反復作品です。今も日々、悪戦苦闘しております。

Q 作品を制作する上で一番重要視されていることは、どんなことですか。

A 焼成と乾燥です。焼物ゆえに焼成に細心の注意を払うのは至極当然な事ですが、それ以上に、デフォルメした器形の割れを防ぐため、神経を傾注して時間をかけてゆっくりゆっくり乾燥させなければなりません。そのため、何時も、数点制作します。磁器という素材にこだわりを持って制作されているかと思いますが、その思いをお聞かせください。

A 以前にも述べましたが、緻密な素材とのかかわりの中で、形態の有機性は、ただ曲線や曲面によって構成されている、ということだけではなく、生成するものの運動のイメージ、温かさややさしさ、その本源的なエロチシズムにもあるのではないかと、考えながら制作しています。また、思惑通りにいかない磁土だからこそ、心惹かれ、制作に専念できるのではないかとも思っております。

最後に、今後の抱負をお願い致します。

A ネットワークが分析し判断し結果を出す現代社会ではありますが、陶芸の持つ自然と人工の美の調和を独自の見識で探し求め、物づくりの表現者としてこれからの仕事を切り拓いていかなければならないと思っています。そして、素材との対話の結果でない時の流れの中で、作品をどう生み出そうか、と作陶の導をつかみながら、感謝の気持ちを忘れずに、くり返し・反復の日々を送っていきたいと思います。なにとぞご指導ご鞭撻下さいませよう、宜しく願っています。

Q A 待田和宏  
ニユース係

## 改組新第七回日展特選

### 「今を歩む」(漆) 繁昌 孝二

この度、改組新第七回日展において、特選を受賞出来ましたこと、審査に当たられた先生方にご心より御礼申し上げますと共に、寺池静人会長をはじめ、日本新工芸家連盟の諸先生方の長年に渡るご指導・ご助言の賜物と、深く感謝致しております。

ちょうど十年前に思いがけずも一回目の特選を受賞してから、少なからず強気になったり弱気になったりを繰り返して、様々な複雑な心境を経た中で今回の受賞は感慨深いものがあります。四十二年前に漆に出会い、その神秘的で深みのある独特な質感に大きな魅力を感じ、それ以降漆に取り付かれた一人です。しかしながら、自ら形を創造し具体的に漆塗りのための素地をつくるという立体造形に取り組みようになった行為自体は、三十年前の第十二回日本新工芸展への初出品を目指すようになつてからでした。それを考えますとまさにゼロからの出発で、この三十年間日本新工芸家連盟に育てて頂いたことを疑う余地はありません。立体造形の良きあり方とは？美しいフォルムとは？人の目にはどのように映り感じられるのか？そして公募展としての作り方や見せ方は？等多くのことを教えて頂きました。

今回の受賞作「今を歩む」について述べさせて頂きます。自然界の命あるものの多くは、美しく強い生命力を持っています。時には厳しい状況下であっても、耐え忍んで再び息榮え輝きます。そして私達人間も同様です。そんな気持ちの抽象表現として制作しました。また、日本の貴重な工芸素材である漆の質感を大事にしつつ、三次元の立体物として、三百六十度のあらゆる方向から見て魅力的で楽しめるフォルムの制作を目指しました。

しかしながら展示されている作品を見ますと、漆芸としても立体造形としてもまだまだ至らぬ点が多々あります。今後この喜びや反省、そして受賞の

責任を肝に銘じて、繁昌ワールドの漆芸や立体造形を確立できると考えています。今後とも先生方におかれましては、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、今回の受賞に対して感謝の気持ちを表すには、より良い作品づくりを実現すること、日本新工芸家連盟の今後の運営や日本新工芸展の開催が、より良い方向で今後も継続し、特に私よりも若い方々等が希望や夢を持てる場であるように、微力ではありますが少しでも尽力して行かなければと感じる次第です。それが日本新工芸家連盟及びこれまでご指導頂いた先生方や先輩方への恩返しでもあると感じています。



## 改組新第七回日展特選

「okura rockets」(梁) 近藤 卓浪

この度、改組新第七回日展に於いて特選を受賞することができました。まさか、という思いと、まぎれ入選出来るかというのが大前提でありましたので、驚きと同時に嬉しさが沸き上がって参りました。身近でいつも制作に対する姿勢や考え方、取り組み方など影響を受けている先生方、並びに先輩方のご指導のおかげで私自身、まだ十数年ではありませんが制作を続けることが出来たと感じています。また、普段の日常生活の中で、制作に打ち込めることが出来たのも、妻をはじめ、家族のおかげだと思えます。昨年は大変な年で、誰も体験したことのない未曾有のコロナ禍のなか度重なる展覧会の延期、中止の連

続で普通の生活さえままならない日々でした。おそらく誰もがそういう状態の中で、制作をするモチベーションをどう維持するか。自問自答しながら何ヶ月か過ぎました。ある時、コロナ終息を願って全国各地で打ち上げ花火を上げようというイベントがあり、その時、夜空に光る花火を見つめながら思った事がありました。何千万の小さな火花が、この暗い空を一瞬でも明るく、綺麗に彩る。小さな光が集まって、大きくスパークする。今まで当たり前の事のように見ていた花火でしたが、改めて見ると素晴らしい事のように思いました。この小さな体験から、今回の作品制作は心躍るようなものを作りたいと思えました。題材はオクラなので、近所の畑でスケッチから始めました。オクラを選んだ理由は、丁度その頃、地元の料理屋さんで、テイクアウト用の熨斗紙を描いて欲しいと頼まれ食材をテーマに週替わりで自分なりのテーマで描いていると、食材をテーマに制作してみたいと思うようになった事がきっかけです。スケッチから制作は始まり、なるべくその対象の成り立ちや、その形状と質感を捉える事を意識しながら描いていきます。自然との対話が大事だという師の言葉に感銘を受け、スケッチはなるべくその場所で五感を使って描くの心がけています。出発点はあくまで具象的な表現を意識しているのですが、制作に於いてどう作品として模様にするかという事は自分にとって、鑑賞者、使う人にとってどのような意味があるのかと考えた時に、そこに憧憬を見たいのではないかと、ロマン主義や神秘主義や夢のような空想までは行かなくとも、観たことがないものを作ってみたいという思いがあるからこそ制作しているのだと思えます。



今回の作品も自然というフィルターを通した目線でスケッチした時に宇宙に向かって、発射して飛んで遊んでいるようなユーモアやストーリーがあるような気がして、スケッチの段階で模様作りをしながら、最終的に色を付けていきます。染める事よりも草稿に時間をかけています。このように、いかに観る人使う人にドキドキして貰うかという大きなテーマを持って自然や人と楽しく、時に厳しく、常にモノ作りに対する情熱をもって、これからも改めて、今回の日展特選の受賞を励みに、より一層制作に励みたいと思っておりますので、何卒これからも宜しくお願い致します。

## 改組新第七回日展の審査を終えて

内藤 英治

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、第四十二回日本新工芸展が中止のやむなきに至りました。

その後も感染の収束が見えないまま、今年の日展は開催されるのだろうかと思案しておりましたところ、審査員委嘱の通知を頂きました。この様な時にも日展が開催されるのだという思いと、こんな時だからこそ開催するのだという、両方の意味を持った展覧会開催への思いを感じました。

開催されるからには、出品する者として、鑑審査をさせて頂く者として、展覧会は気持ち晴れる元気になる様な素晴らしいものであらねばならないとの思いを持って臨みました。

出品点数も前年とほぼ変わらない状況に安堵しながら、感染予防対策が十分に考えられた審査会場とスケジュールの中、以前とは違った雰囲気の中で、出品者それぞれが特に思いを込めた作品の気迫に触れながらの審査となりました。

この様な時期だからこそ、おおらかに明るさを意識した作品や、時間をかけてじっくり取り組まれて



見応えのある作品が多く見られました。一方、確かな技術、表現力を見せているにもかかわらず、あまりにも考え過ぎてしまったので、うかイメージが内に籠もってしまった、スケール感に乏しく広がりを感じられなくて、残念な思いをした作品も目につきました。また、平面作品の中で色彩が暗く感じるものが散見でき、本来の色彩の美しさや見えさせる作品にあまり出会わなかった事も申し添えます。

こうした残念な思いをした作品の中に、私たち新工芸のメンバーであろうと思われる作品が多く見受けられました。改めて、作者独自の方向性とイメージの深まり、素材と技法との関わりを再確認、考え過ぎない範囲で)していく必要があるのではないかと思います。

そうした中、繁昌孝二さんが、球根の様なふっくらとした乾漆技法による立体に、黒漆と加飾を施して内側から命の芽生えを感じさせる生命感あふれる作品で二度目の特選を受賞。近藤卓浪さんが、畑に実るオクラがロケットの様にはじけて、楽しく飛び交う様に見立てた独自の発想のろう染め作品で、新たな染織表現として初めての特選となりました。

このニュースが発行される頃には東京展も終了していますが、今後も出来るだけ会場に足を運んで全体をじっくり見て頂き、この時代にあつてのもの作り、作品のあり様についてを思いながら、自身の作品を見てほしいものです。きっと、新たな気持ちで作品に挑んでいく力が湧いてくるだろうと大いに期待するものです。

## 改組新第七回日展新入選者喜びの声

大塚 眞盛「動く形態」(陶) 埼玉  
 合原 梓弓「碧海」(陶) 東京  
 杉山 愛子「万丈」(陶) 愛知  
 中井 和仁「黒の偶像」(陶) 滋賀  
 廣田 千恵「深海に遊ぶ」(漆) 滋賀  
 長谷川 僚「秋の暮」(竹) 大分  
 山田 和子「薫風」(人) 長崎



● 大塚眞盛「動く形態」(陶) 埼玉  
 この度念願だった日展に初入選することが出来ました。これは、ひとえに指導してくださった先生方そして関東地区会の皆様のお陰と、深く感謝しています。作品作りのコンセプトでは、「動く」  
 「羽ばたく」等の抽象的な言葉を具現化することに置いています。入選作は二百六十六ピースの粘土板を組み合わせて「動き」を表現しました。思わぬ発見と失敗の連続でしたが、何とか完成出来て満足しています。今後も精進を重ねて参りたいと思っております。よろしくご指導願います。



● 合原梓弓「碧海」(陶) 東京  
 日展の初入選、大変嬉しく思います。これまでの諸先生方の助言とご指導の賜物と、感謝致しております。波乱万丈の人生を穏やかな生活と陶芸への情熱を育ませ、海の中の青と光の競演を教えしてくれた主人へのプレゼントでもあります。還暦でダイビングライセンスを取得して、海の中の碧に魅了されました。これからも心の思い出と一緒に空からの青や海中の青色、そして砂の質感を探求していきたいと思っております。宜しくお願致します。

● 杉山愛子「万丈」(陶) 愛知  
 私達を取り巻く環境が様変わりしておりますが、



私自身は変わる事無く普段通りです。陶芸も長く続けておりますが、趣味の延長でした。勉強会での先生方のアドバイスをお聞きしながら自分の足りない部分を気付かされ本当に有難く思っております。今回の作品の題名は「万丈」、高みをめざして命名しました。相性の良い釉薬を見つけるのに苦心しましたが、これからも探し続けます。



● 中井和仁「黒の偶像」(陶) 滋賀  
 初出品・初入選にあたり、心より皆様に感謝申し上げます。長らく陶芸の世界に身を置き、遠まきに日展を観てまいりましたが、この度より当事者となり、今後迷う事なく、この道を歩んで参りたいと思っております。私自身の、よるべ」となる様なモノとして「黒の偶像」という作品を制作しましたが、このモノこそが私自身なんだと、今、改めて思っております。「己こそ己のよるべなり」という事なのでしょうか？



● 廣田千恵「深海に遊ぶ」(漆) 滋賀  
 この度は日展に初入選させていただき、大変喜んでおります。誠にありがとうございます。父、祖父も入選させていただいたことのある日は幼い頃からの憧れの展覧会であり、またなかなか登り始めることのできない高く聳える山のような存在でした。今、ひとつ夢が叶ったと思います。昨年は想像もしてみなかったコロナウイルスの蔓延に深く驚き、環境が整うということがいかに有難いことかと実感し、できることならばと、挑戦させていただきました。三十年ほど創つてまいりましたが、漆という素材は扱い難く、様々な技法は奥が深く、私には未だに自由自在に操れるものではありません。それだけにまだ可能性があると信じて、これからもマイペースに、粘り強く、創り続けていきたいと思

っております。今後とも宜しくご指導を賜りますようお願い申し上げます。

### ● 長谷川 僚「秋の暮」(竹) 大分

日展初入選、大変うれしく思います。出品した「秋の暮」は、別府では輪弧編みと呼ばれる技法を用い、その編みの美しさを分かりやすく作品にしたいという思いから、秋の夕暮れ時の美しさと侘しさを表現しています。このような時代だからこそ、できることや伝えたいことも多々あります。今後どのような方向に日本が、世界が向かっていくのか。そして自分は何を作っていくべきか。日々研鑽を重ね、制作活動に勤しんで参ります。



### ● 山田和子「薫風」(人) 長崎

私にもこんな人形創れるかしら、創りたい……との思いで今日まで試行錯誤しながら続けて参りました。この度、日展に入選させて頂き夢が叶い嬉しく思っております。これもひとえに諸先生方よりご指導を頂いた賜物だと感謝しております。本来ならば会場にて作品を見たいところですが、コロナ禍の為ままならず、図録を求め皆様の作品に圧倒され自分の未熟さを痛感しております。これからも精進して参ります。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



## 審議委員会報告

丹下 雄介

春から新型コロナウイルス流行の影響下、第四十二回日本新工芸展は作品搬入後、審査も行われず開催中止となり、精魂込めて制作された作品は日の目を見る事無く手元に戻る事となりました。また同時開催で各地区審議員と会員各位のご協力で三回目を迎える予定だった、特別企画「学生選抜展」も開催出来ないまま学生、生徒さんの元へ作品をお返しし

なければならなかった事は残念でなりません。一方で開催が心配されていた今年度の日展が開催された事は、これからも続くであろうウイズコロナの環境の中での展覧会開催の在り方に一つの指標を与えた様に思われます。

そもそも私共審議員は、日本新工芸家連盟のより良い運営のために会員の皆様のご意見等々を反映させる役割を担っています。そのために各地区から選ばれた審議員が毎年幾度かの会議を持ち意見交換を行っております。

秋は日展開催に合わせて開かれる審議員会を、今年にはコロナ自粛のため、携帯アプリ「LINE」のグループ機能を使い連絡を取り合い、更にインターネットを用いてオンライン会議を初めて開催致しました。IT機器に不慣れな審議員も多いためではありましたが、遠方から簡単に参加出来る会議の在り方の必要性を強く感じさせられた次第です。

内容として、今年開催予定の第四十三回日本新工芸展、審査及び開催のためのコロナ対策と開催中止の判断基準について、それと現在の日本新工芸家連盟の財務環境をより良くするための改善対策について議論し、理事会へ多くの提案をさせて頂きました。また引き続き今年度の学生選抜展の募集、開催に向けての準備活動を進めております。この新工芸ニュースの皆様のお手元に届く頃には、全国の学校からの出品予定もほぼ決定している事でしょう。

今年の第四十三回日本新工芸展が無事開催される事を祈るばかりです。

## 第四十三回日本新工芸展に向かつて

待田 和宏

二〇一九年十一月一日開催の理事会で審査主任の拜命を受け、身の引き締まる思いと責任の重さを痛感しております。

新型コロナウイルスの感染が広がってきた二〇二

〇年三月、作品搬入後の鑑審査の延期、審査員・審査事務係の縮小、そして鑑審査の中止、感染症の収束を待つものの緊急事態宣言が発令、第四十二回日本新工芸展が中止となりました。

中止と決断されるまでのご苦労、その後の様々な手続き等で大変な思いをされた会長、理事長はじめ事務局、各係の皆様、(株)谷中田美術様、そのほか多くの方々には、感謝の言葉しかありません。

制作した作品が展示されず、コロナ禍、何ともやるせない思いで日々過ごされていると思いますが、それをバネにして、意欲的作品を出品されますよう期待します。

去る十一月十一日の臨時理事会での承認、決議により、審査員・審査事務係の人数が、例年の約半数となりました。責務を一層感じつつ、公平で公正なる鑑審査に臨みたいと思っております。

不肖の身ではありますが、精一杯務めさせて頂いたでございます。なにとぞ、審査員・審査事務係の皆様には、ご無理をなさらないよう、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二二年、四十三回展が無事開催されますことをアマビエ様に願うばかりです。

## 地区会ニュース

### ○関東地区会

新型コロナウイルスの大流行により、多くの展覧会などが中止となる中、関東地区会も会員展研究会などが中止となりました。このような情勢の中、日展の開催が発表され、搬入を兼ねた研究会を十月に開催。なお、理事の先生方と研究部員の打ち合わせにLINE及びリモートを活用し、会員の方々には、三密を避け、マスク着用、手指消毒など感染対策にご協力いただき無事終了出来ました。これからも考えられる最大限の感染予防対策を行い、研究会など実施したいと思っております。

### ○東海地区会

令和二年十月十日(土)瀬戸市東明公民館にて、改組新第七回日展の作品搬入を致しました。東海会として無鑑査三点・公募二十三点の合計二十六点でありました。前年に引き続き、台風の影響を受け雨の中での搬入作業となりました。コロナ禍ともあり出席者の氏名と連絡先電話番号を記入し、ソーシャルディスタンスをとりながら、谷中田美術様のお蔭と出品者の皆様のお力で無事搬入できました。コロナの特効薬が出来るまではリモート・ズームの使用等、諸先生にご指導をいただきながら研究会の新しいあり方を模索し、より良い方向を目指せばと強く祈念します。学生展に係わるようになり学校訪問をしております。デザイン教育ばかりで、手を使用してのものづくりの思考がなくなっている状況に愕然とさせられています。日本人の生きる道は「ものづくり」であると思っっている自分は浦島太郎になってしまったのかと。「ITと手仕事によるものづくり」。どう調和させながら進むかを皆様方にご指導いただきたくお願い申し上げます。

### ○石川・富山地区会

二〇二〇年は新型コロナウイルスのまん延で辛抱の一年でしたが、石川会・富山会としては何もできませんでした。個展やグループ展を開催し新作を発表してきた会員もいるようです。二〇二一年は一月十九日から二十四日まで石川県政記念のき迎賓館で第三十四回石川会展を富山会の協賛出品を得て開催します。幸い北陸は新型コロナウィルスの影響が少なく、気持ち的に少し楽に取り組みそうです。油断することなく新しい年をスタートしたいと思っています。

### ○近畿地区会

十一月初旬、通常より広いスペースで感染対策をとり、改組新日展反省会を開催しました。多く

の参加者の講評、質疑応答と共に公募展へ出展する作品に何が必要かを改めて考える時間となりました。また、例年より早い適切なタイミングで行われた為、春の制作へ向けて切り替えができました。通常の研究会への参加者減少に比べ反省会は増加しており、今後の研究会の在り方を示していると思われ。課題として、参加できなかった会員へ内容を伝えることで、より有効な研究会となるでしょう。

### ○九州地区会

会の様子は、例に漏れず自粛を余儀なくされています(令和二年十一月現在)。九州会は、日本新工芸展、日展に学ぶため、これら二展覧会への出品活動の応援と九州新工芸展の運営を活動の柱としてきました。例年のように行事を行うことはできませんでしたが、そんな中、改組新第七回日展で二名(人形、竹工芸)の新人選者を出すことができました。お二人の造形力によることはもちろんですが、会としての喜びでもあります。新たに迎える第四十三回日本新工芸展に期待が膨らみます。

### おもいでばなし

寺池 静人

昭和五十九年楠部彌次先生が他界され、先生亡きあと、昭和六十二年会を離脱した人達で日工会が出来る。昭和六十二年第九回日本新工芸展が帖佐美行先生を中心に気も新たにも多くの出品を得て東急百貨店本店会場で三笠宮殿下同妃殿下の御臨席をおおぎ開催され、作品が明るい叫好。大きな変動もありましたが、雨降って地固まるである。

春、秋の展覧会に向けての研究会があり、帖佐先生が出席された折、作品に厳しい批評もあり作者が畏縮するようなこともあり。次作へのアドバイスで反発し制作することを期待されてい

たように感じた。

楠部先生は、褒めるのはいつでも褒められる、しかし教える事が無い、ということ、明日からは来なくても良い、と言っておられた。

帖佐先生が京都にいられた時、少人数の研究会を持つこともあり参加者の作品に活気が出たように思う。自主的な研究会の大切さ。正倉院展や寺院の仏像等の拝観にご一緒した折、木の枝を見て居られるので質問すると、枝を指して落葉の後に小さくふくらみ次なる芽がと、注意して見なければ見おとすようなことも観察され作品に生かされている。開花した花は美しいがいずれ散るのだからと次へと続く蕾も描く。葉と葉が重なって見えるが僅かの透き間があり空気が流れている、良く見るようにと教わる。線を画く時気をつけるようになった。空気と風を描くことは生涯の宿題。

自然から教わることも多く、いろいろなものを良く観察し、何を表現したいのか、原材料、表現方法は異なるが得意とする手法で制作をと思う。

先輩の一言、自信のある手法(表現方法)を三つ持つと、順次出し制作することでスランプにはならずあとはその時々々の努力。又、次作に向け出来た構図を一度解体し同じ画材で組み立て構成すると前とは異なった作品になる、同一テーマで何か出来る。パズルは元の画面に早く戻すことだが、考え方を少し変えてみて。いずれもご自身の経験話を話して下さったと思う。感謝。

気の合った先輩とお酒を共にすることが多々あり、酔う程に作品の話となる。或る時激論に、お前は飲みなないとなっても次に会った時又一杯となる。飲みながら諸々の話も出来る利点も多々ほどほどに思う。コロナ禍に悩まされる今日、人生には色々なことがあるが、大きく目標を定め、互いに健康に留意し努力を惜しまず目標に向け前進を願うものです。

## 第43回日本新工芸展開催要項 (大要)

- 名称 第43回日本新工芸展
- 主催 公益社団法人 日本新工芸家連盟
- 後援 文化庁・東京都・京都府・京都市・NHK
- 会場 国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2
- 会期 2021年5月12日(水)～5月23日(日)(18日(火)休館)午前10時～午後6時
- 委嘱審査員 坂元暁美(上野の森美術館学芸課長) 外館和子(美術評論家、多摩美術大学教授)
- 審査員 ◎待田和宏(磁)○丹下雄介(染)  
加藤由起(染) 叶道夫(陶) 木村正和(木) 生野徳三(竹) 高橋和則(陶)  
☆半田裕哉(陶) 古瀬政弘(鍛) 水谷俊雄(陶) 山口美智江(陶)  
◎主任 ○副主任 ☆新審査員
- 賞 内閣総理大臣賞 1名 文部科学大臣賞 1名 東京都知事賞 1名 京都府知事賞 1名  
京都市長賞 1名 NHK会長賞 1名 彫刻の森美術館賞 1名 上野の森美術館賞 1名  
彫刻の森美術館奨励賞 1名 上野の森美術館奨励賞 1名 日本新工芸会員賞 3名  
日本新工芸会友賞 1名 日本新工芸賞 4名
- 搬入 1. 場所—(株)谷中田美術 〒113-0023 東京都文京区向丘2-33-5 (☎03-3823-1539)  
2. 日時—公募作品、会員作品共 3月24日(水)・3月25日(木) 午前10時～午後4時  
3. 出品点数—公募作品、制限なし 会員作品1点  
4. 作品寸法—(A) 立体—50cm立方換算(125,000立方cm)以内  
但し、高さ100cm、幅100cm、奥行100cm以内  
(B) 平面—縦230cm、横250cm以内  
(C) AB共に60kg以内  
5. 出品手数料—会員作品・公募作品共1点につき8,000円。30歳未満は半額の4,000円とする  
(但し、2点以上は1点につき4,000円ずつ加算)  
6. 事故対策費—会員作品・公募作品共1点につき1,000円
- 付則 1. 未発表の創作品であること。  
2. 公募作品は鑑審査のうえ陳列する。審査は主催者において選出した審査員により行う。  
3. 会員作品と雖も合議のうえ陳列辞退を求めることがある。  
4. 陳列作品は本連盟主催の各展覧会に協力するものとする。搬入された作品は、搬出に指定された日まで個人の都合で移動できない。  
5. 陳列作品の複写及刊行物等の権利は主催者が所有する。  
6. 会期迄に全出品作掲載の図録を作成する。(オールカラー)  
7. 出品しようとする作品の搬入・搬出の費用はすべて出品者の負担とする。  
8. 搬入作品の保管には万全を期すが天災その他不可抗力と見做される損害に対しては責任を負わない。

### 巡回展会期

東海展 六月十六日(水)～六月二十二日(火)  
名古屋・松坂屋美術館  
近畿展 六月二十九日(火)～七月四日(日)  
京都市京セラ美術館

### あしがき

令和二年日展は開催。日本新工芸家連盟会員から、日展会員賞と特選二名の受賞。日展審査員を務められた内藤先生から講評と今後制作に向かう参考、励ましのお言葉を頂きました。  
この様な時だからこそ、個々の想いを作品で伝える事が大切。会員の皆様、令和三年、心新たに明るく元気に第四十三回日本新工芸展の作品制作に励みましょ。尚、前号に続いて寺池先生が若き頃の貴重な「おもいでばなし」を寄稿下さいました。コロナ感染で行動が難しい今日ですが、各地区ニュースに活動内容が届きました。

### ニュース会報係

◎片山 雅美 ○中野 悟朗  
大橋 敏彦 金田 一司  
徳中 忍 土田 信久  
徳永 武洋 長谷川雅也  
古瀬 政弘 村山 恵子  
森 克徳

印刷所 ニューカラー写真印刷(株)

京都市伏見区久我西出町3-161